日本ボストン会会報

発行所　日本ボストン会事務局

「第九」メドフォード公演

「第九」メドフォード公演実行委員会事務局長　渡辺　行守

2000年8月24日（木）、私達の10年来の夢であった「第九」メドフォード公演が、マサチューセッツ州メドフォード市のタフツ大学コーエンオーディトリアムで行われました。

これはミレニアム年が、のべおか「第九」を歌う会の15周年、延岡フィルハーモニー管弦楽団の10周年、それに延岡市（宮崎県）とメドフォード市が姉妹都市締結をして20周年にあたるのを記念して、音楽を通した文化交流を目的とし、メドフォード市でベートーベンの「第九」を演奏しようというものでした。参加者はオーケストラと合唱団、それにサポーターを含め総勢 250名という大デレゲーションとなりました。8月21日大訪問団は、ミネアポリス経由でボストン入りをしました。

ボストンは歴史を感じさせる建物やボストンコモンに代表されるような緑あふれるところでした。その緑に赤レンガの壁がよく似合う都市で、皆すぐに気に入った様でした。

翌日のメドフォード高校での記念式典とウエルカムパーティーも、音楽とダンス、延岡の盆踊りなどで大いに盛り上がり、素晴らしい交流が出来ました。

さて公演当日、開演1時間位前から聴衆が集まり始め、開演前には満席となりました。公演はまず、今回の演奏会のために作った「遙かなる幻影」という延岡の風景をイメージした曲の演奏が始まりました。休憩の後、「第九」の演奏がはじまり、オーケストラと合唱団は心を一つにした演奏を行いました。

第4楽章での合唱が終わると、一瞬の静寂の後で、会場からブラボーの声とスタンディングオベーションによる歓声が会場内に響き渡りました。今回の訪問の目的がまさにこの一瞬に凝縮されていました。民間主体のこの大デレゲーションがこのような形で成功できたことは、一人一人の努力と団結、そして現地の方々の惜しみない協力があっての賜物だと思います。

今回の演奏旅行ではボストン総領事の山本忠通総領事をはじめ、ボストン日本人会の小久保武会長、望月典子さん、寺田耕三さん、日本語学校の森上祐治校長。タフツ大学のバーバラさん、メドフォード高校のロイ教育長、マーシャさん。アサヒアメリカのボブ・ルイスさん、数え上げたらきりがないほど多くの方にお世話になりました。感謝申し上げます。

昨年はアメリカにとっても、世界にとっても悲しい事件がありました。ベートーベンが作曲したこの交響楽「第九」は世界の平和と人類愛を歌い上げたものですが、この気持ちがある限り、必ず世界は平和になると思います。

メドフォード市と延岡市の交流は高校生の交換留学生制度という形で続いていますが、今年はこの公演でソリストを務めていただいた現地の4人のソリストにきていただき、「第九」の演奏会をすることが決まり、広がりをみせています。これからも交流がさらに広がって行くことと思います。ボストンは将来、もう一度訪れてみたいところになりました。

日本ボストン会イベント

観桜会（千鳥が淵）　3月31日（日）	歴史を飲もう会（札幌訪問）7月13～14日
親睦ゴルフ会（泉カントリー倶楽部）	ハイキング　5月19日（日）
4月11日（木）	総会　11月15日（金）
10月17日（木）	会報#20号（原稿締切8月末）10月中旬発行予定

歴史とハイキングの会

本郷・湯島文学散歩

中垣　純子

2001年12月2日（日）、この日は良く晴れていて、気温は暑くもなく寒くもなく、絶好の散策日和でした。日本画の大家・横山大観記念館からスタートしました。大観の好みで造られたという美しい庭園も垣間見ることができました。東京大学のあの有名な「安田講堂」にも初めてお目にかかり、三四郎池、そしていかにも重厚な歴史を感じさせる赤門を通りぬけました。

本郷通りを通り、しばらく進むと、知っている人間でなければ絶対に行けないと思われるような、とても入り組んだ道になり、まるで、明治時代にタイムスリップしたかのようでした。

頂いた資料を見ると良く判るのですが、その近辺は、夏目漱石、樋口一葉、宮澤賢治、石川啄木、坪内逍遙など、多くの文豪達のゆかりの地でした。とても興味深く思い、是非、先頭の篠崎さんのすばらしい解説を聞きながら歩きたかったのですが、みなさんとてもお元気でいらっしゃって、普段から運動不足の私は、恥ずかしながら、後ろから付いていくのに精一杯でした。

それから、旧岩崎邸の外壁に沿って歩き、最後に湯島天満宮にお参りをしました。京都の北野天満宮・大阪の天満天神・・札幌にも天神山があります。全国にいったいどのくらいの天神様があるのでしょうか。そんなことを思いながら、受験を控えている故郷の知人の為に、合格祈願鉛筆を購入しました。

そうして、やっと、テンプラ屋さんの『天庄』に着き、おいしいお食事とみなさんの、ボストンの思い出話などを楽しみました。

東京で一番古い町並みの散策。それは、小さな文学の歴史散策でしたが、私にとっては、貴重な、新しい発見の旅でもありました。とても印象深かったのは、まるで中国か何処かの居住地を思わせる、混沌とした建物が密集した、古都のような道の狭い、趣きのある住宅が立ち並ぶ町並みでした。東京にもこのような場所があったことに、驚きと感動を覚えました。

行くところ全てが初めての場所でしたので、東京に居ながらにして小旅行気分で、日常を忘れてリラックスすることができました。とても感謝しております。また、機会があれば、参加させていただきたいと思っています。

どうも、ありがとうございました。

2002年のお花見へのお誘い

開催日を3月31日（日）に変更

今年のお花見を下記の要領で開催します。

昨年はかなり盛りを過ぎたお花見となってしまいました。気象庁の発表によれば、今年の東京の開花予想が3月20日に繰上げられました。そこで、日程を大幅に繰上げ3月31日（日）に実施します。是非ご参加ください。春爛漫の桜の下で夜桜を楽しみましょう。幹事までお申し越し下さい。

例年40名程度の参加を戴いております。昨年はボストンからのお客様6名を入れて56名の大観桜会でした。幹事は午後5時30分から6時までの間、『千鳥が淵』の旧フェアモントホテル（現在営業していません）の前で皆さんをお待ちしております。

幹事の携帯電話は090-254-80085 です。当日何かありましたら、こちらにご連絡ください。小雨決行予定です。雨の夜桜も良いものと思います。

記

日時: 2002年3月31日（日）午後5時30分～6時
集合場所: 千鳥が淵、旧フェアモントホテル前
　千代田区九段南2－1－17
　（地下鉄東西線、半蔵門線、都営新宿線
　「九段下駅」2番出口より徒歩）
宴会開始時間：午後7時頃（6時30分から入場可）
会場：　「九段会館」（地下鉄「九段下駅」前）
　千代田区九段南1－6－5
　☎03－3261－5521
費用：　食事　5000円
　飲物　1500円（2時間飲み放題）
　合計　6500円＋消費税＋缶ビール代
申込先：　藤盛紀明

申込み締切り：3月20日（水）

於ボストン日本語学校

「人生をどう生きるか」

MIT 教授　利根川　進

この度はボストン日本語学校創立２５周年記念の式典という非常に晴れがましい席にお招きをいただき、そして皆さんにお話する機会を与えて下さいましたことに対して、校長先生はじめ、他の先生方、ＰＴＡの皆さん、すべての方々に心から感謝を申し上げます。

今日は、僕自身が皆さんの年頃にどうしたか、ということからまずお話をしたいと思います。

＊　＊　＊　＊　＊

もう随分昔の話です。僕は日本の名古屋という所で生まれました。僕の父親は会社員でしたので、国内ですけれどもご多分に洩れずあちらこちらへ転勤というものを経験しました。大阪から始まって、北陸の富山県、四国の愛媛県といった、都会から比較的離れた町で子供の頃を過ごしました。今の日本の様に、塾などというものはなくて、まあ勉強もよくやったとは思いますが、家に帰ると近所の子供達と一緒に空き地で野球をやったり、川や海に魚を釣りに行ったり、大自然に囲まれて、言わば泥まみれになって毎日を楽しみながら中学２年生まですごしていました。

ところが、中学３年生になる時に、両親が僕の将来のことを心配して、都会の学校に通わせるために、東京にいたおじの家に僕を預けました。そして中学３年生を東京都内の公立の中学校で過ごし、東京大学にたくさんの生徒を送りこんでいた当時日本一の進学校、日比谷高校という学校がありましたが、この日比谷を受験して、幸いそこに入学することができました。

この日比谷高校に入るまでは、僕の学校の成績はなかなか良くて、学年でずっとトップクラスだったんですね。ところが、日比谷高校というのはずごい秀才が全国各地からいっぱい集まって来ているんですね。それで学業成績については、入学後、真ん中からちょっといい方かな、そういう程度になってしまいました。

今でも思い出すことがありますが、僕のクラスメートの一人にずば抜けて成績が良い子がいました。

なにしろこの子は、４月に国語や数学の教科書を貰うと、夏休みが終わるまでに、全部自分で内容を勉強しちゃうんです。彼は試験が一番難しいと言われている、東京大学の理科三類を受験して、当然のごとくストレートで入学しました。僕の方はと言えば、東大を受験するのは諦めて、京都大学を受験しましたが、１年目はうまく通らない。１年間浪人をして、２年目に入学したわけです。その後、僕は大学を卒業し、すぐアメリカの大学院、サンディエゴというところにある、カリフォルニア大学に留学してしまったので、長い間このすごい秀才に会うことはなかったんです。

だけど１０年か、１２年位前に、東京で行われた国際学会で、偶然彼に再会しました。彼は一応の学者になっていたけれども、世界的に超一流のすばらしい研究した、ということではなかったんです。

＊　＊　＊　＊　＊

そこで僕は皆さんに何を言おうとしているかと言いますと、こういうことなんです。それは、それぞれの人間が大きくなって社会に出て、素晴らしい業績や成果をあげて、本人の非常に充実して満足した人生を送るそのためには、いわゆる学校の学業成績が良ければ良いというものではないと、それだけではだめなんだ、ということを言いたいわけです。学業の成績以外にも、いろいろ重要なことがあるんだ、ということを皆さんに認識して欲しいのです。

例えば、困っているクラスメートがそばにいると、なんとかこの子をヘルプしてやりたい、と自然にしかも強い気持ちを持てるという、それも一つの能力、人間の大事な能力です。そしてその気持ちは、いわゆるボランティア活動に結びつくわけですね。ボランティア活動をして社会に貢献していくと、その中で人と一緒に働くことの重要性、働き方、あるいはリーダーシップをとって人々をオーガナイズし、大事な仕事をする、そういう能力もまた非常に重要なんですね。それから考え方によっては、例えば音楽とか、アートとか、学校ではあまり時間が使えない

ボストン日本語学校創立２５周年記念講演(つづき)

人間の行いについて、興味を持って辛くても一生懸命練習をしてチャレンジしていく、そういうことも常に重要です。そういったことが出来るようになった人も、やっぱり僕は素晴らしい人だと思います。

成績が良くて一番いい学校に入ると言うことと、能力を持った素晴らしい人だということとは、必ずしも一致しないんです。だから、学校の成績だけではその人の価値というのは計れないんだ、人にはいろいろな価値があるんだ、いろんな能力があるんだ、ということを認識して欲しいと思います。

勉強を一生懸命やるということも、もちろん重要です。けれども、先生や教科書から与えられた課題をただまんべんなく、そして素早く出来るようになる、ということだけでは不十分だと言っているんですね。人間には、それぞれ得意で好きな科目とそうでない科目があって当然なんです。自分が得意で好きな科目、それを思う存分やって、もっとその科目が得意になったり、好きになったりすること、僕はこれが重要だと思います。

＊　＊　＊　＊　＊

僕自身、どちらかというと国語とか社会よりも、理科系の数学とか理科（サイエンス），そちらの方はわりと好きだったんですね。そして、大学３年生の時に、フランス人の研究を本で読み、非常に素晴らしいと感激し、分子生物学（モレキュラーバイオロジー）、人間を含めた全ての生物の研究をすることに強い興味を持ちました。

実を言うと僕は、この時まで生物という学問は、あまり勉強をしたことがなかった。理科では、物理とか化学とかいう学問があるわけだけど、生物はほとんど勉強していなかった。ある意味恥ずかしい話だけど、人間の体は細胞がたくさん寄り集まって出来ているということを、僕は２１歳になるまで知らなかった。大学に入って、初めて生物の授業を受けてそのことを知り、その頃京都の下宿の隣に数学を専門にしている友達がいて、彼の所に行き「今日こんな面白いことを習ったよ、人間の体ってぇのはな、細胞からできてるんだよ」って言ったら、友達が「おまえそんなこと知らなかったんか」って言われてね、随分馬鹿にされたのを覚えています。

だけど、その２１歳の時に、フランス人の生物学の研究に非常に興味を抱いて、生物学の方向に進むことを決心したんですね。そしてその後、１９６３年に日本の大学を卒業すると同時に、生物学者（サイエンティスト）になるため、アメリカに留学し、カリフォルニア、ヨーロッパのスイス、更に現在はボストンのケンブリッジにあるMITという大学で約４０年間にわたって研究をしているわけです。

例えば、スイスで１０年間研究をしてましたが、今でこそ、観光客も行き来して、スイス人も日本や日本人のことを知るようになっているけれど、当時日本は非常に遠い国だったんですね。僕も３０歳代で研究者として比較的若かったこともあって、その１０年間の研究では、いろんな意味で苦労しました。

最初の２年間くらいは研究がうまくいかなくて、そこの研究所からほとんどクビになりそうになったり。「もう、ここに居ちゃいけない。出て行きなさい」と、一旦言われたんです。それでも僕は、自分の研究が好きだったので、一生懸命頑張って、その後比較的早い時期にいい成績をあげ、そこで研究を続けたわけです。そしてそのスイスの研究の成果で、１９８７年に「ノーベル賞」というものをいただいたのです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

僕は今、自分自身の人生を振り返って、確かに「自分の歩んだ道は結構大変だったなぁ」と思うこともあります。だけど一方では「非常に面白い、楽しい、充実した人生。素晴らしい人生だったなぁ」と、そういう風に思うこともあります。何故そういう風に思えるか、それは、自分の人生で何をしたいかということを自分で決めて、その目的のために色々な勉強をし、異文化のアメリカやヨーロッパに住むことも厭わずに「自分にとって最も有利な環境の中で研究をやって行こう」とそのことに重点を置き、異国に移り住み自分のやりたいことを思い切りやってきたから、「（自分の）人生はしんどかったけれども、非常に充実している」とそういう風に思えるんだと思います。君達は、こうして幸いなことに（と僕は言いたいです）、子供の頃にアメリカという異国に滞在し、英語と日本語の少なくとも２つの

ボストン日本語学校創立２５周年記念講演(つづき)

非常に異なった言語を両方使いながら勉強し、色々な活動をしている。多様な文化とその文化の背景を持った友達と接しながら一緒に生活している。これは皆さんにとって、非常に貴重な経験だということを認識して欲しいと思います。

日本はこの２１世紀に向けて、自国だけで物事をやって行くことが出来ない状態になっています。「グローバル化」と言いますが、世界を見ながら、世界と付き合いながら、やっていかなきゃならない。そういう状態の中で、こういう経験が将来社会に出て行く時に、非常に重要な財産になることは間違いない、と僕は確信しています。

そして最後に、皆さんの多くが、何年かするとお父さんの仕事の関係などで日本に帰られるでしょう。その時によく言われることですが、いわゆる帰国子女として、物のやり方や、考え方が少し日本の子供達とは違うために、「いじめ」というものの対象になる可能性がある。もし、そういう目に遭った時に思い出して欲しいのは、先ほど僕が言ったことです。それは、アメリカで何年かこういった経験を積んだということは、皆さんの大事な財産であると。皆さんが日本の子供達と同じように振舞わなきゃならないという理由は何もない。自分の思った通り、自分が良いと思う方向で、物を考えたり行動をしたらよいんです。自分がいかに素晴らしい財産を持っているかをしっかり認識して、勇気と自信を持ってそういう状況に対処して欲しい、そんな風に思います。

生徒からの素朴な質問？

〔生徒〕利根川先生が自分のお子さんを育てるにあたって、方針としていらっしゃることや、一番気をつけていらっしゃることはなんですか？

〔教授〕うん、質問はよくわかったよ。（場内笑い）よくわかったけど、それに対する素晴らしい答えはないんです。（再び笑い）何故ないかと言うと、子供を教育するということは、非常に難しいことなんです。そんなに簡単に、その素晴らしいレシピが見つかるものではない。だから、僕が言えることは、勉強も一生懸命やって欲しいけれども、他のことにも興味を持ってもらいたい。そして、いろいろなことに興味が持てるように環境を作って、この子は一体何に興味があるかということを一生懸命観察して、そしてその方向に気がついたら、それが出来るような環境を整えてやる。そのくらいのことしか僕には出来ないんです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

〔生徒〕ノーベル賞をもらった時、どんな気持ちでしたか？

〔教授〕よく新聞等で「学者が賞を目指して一生懸命研究し、その結果ノーベル賞を獲得した」というように書いてありますけれども、ほとんどの場合はそうではないんですね。ノーベル賞っていうのは、本人が自分の興味の趣くままにやりたい研究を一生懸命やっていた。そうするといつの間にか、「あなたはノーベル賞候補ですよ」、なんて周りの人が言うようになって、ある日突然、「あなたにノーベル賞をあげますよ」って、こう言ってくる。つまり、別にそれを目指して研究しているわけではないんです。結果として、たまたま「どうぞ」と言って向こうから来た。そういうことなんですね。ノーベル賞を選考する委員というのが沢山いるわけですが、その人達はやはり、我々仲間のサイエンティストなわけで、その選考委員が「あなたの研究は素晴らしいですよ」と、評価してくれたことになるわけです。だから、そういう意味では、「どうもありがとうございます」と、いう感じです。（拍手）

（愛知県出身。日本人初のノーベル医学生理楽賞を受賞。マサチューセッツ工科大学ガン研究所生物学部教授。お子様が日本語学校に在学中です。）

（追記：最近の出版物を通じて、教育の在り方、又、高齢化社会における人間の生きざまに、「学び」、「働き」、「遊び」の価値観を終生共存させ、自立した生活を続けることが、元気な高齢者の秘訣であると知りました。遅ればせながら敢えて、この記念講演を2000年10月28日発行、ボストン日本語学校25周年記念誌から転載させて戴きました。編集）

Union Street(N.Y.)，“14th Street”の画家(Ⅲ)

-Raphael Soyer, Moses Soyer, Isaac Soyer-

世界で最も刺激的な都市、New York。この街で多くのアーティスト達が生まれ育ち、創作活動を続けてきた“14th Street”の画家たちは、そこにアトリエを持ち、市井の人々をモデルに生涯創作活動に励んだ。一枚、一枚の絵から当時の人々の生活や時代の空気が立ちのぼってくる。

“14th Street”の画家、双子の兄弟RaphaelとMoses(1899-1974)、そして弟のIsaac(1907-1981)は絵画好きの父の影響もあって彼らは小さい時から絵をかくことが大好きであった。3兄弟はロシアで生まれＵＳＡに来たのはRaphael とMoses が１０歳、そしてIsaac が２歳の時であった。3兄弟の共通点は人々の心の声を表現することであった。

前回に登場したBishop、そしてCitron描く人物像と比べ、自由なタッチで筆が進められている。

Raphael 作Office Girls(1932)、詩的ムードのただよう働く女性たちを描き、まるで夢見る様な彼女の瞳が印象的である。

一方、Bishop作Working Girl(1935)は、新時代を意識したファッショナブルな洋服を身にまとい、キリットした女性達が魅力的に描かれている。

Raphael の作品には必ずと言っていい程彼自身がキャンバスの隅に描かれ、見る人に親近感を与える。

1929年に始まった大恐慌の時代、Soyer 3兄弟は失業者を描くことが多くなった。

Raphael 作Union Square(1934)、Moses 作Employment Agency(1935)、そしてIsaac 作Employment Agency(1937) は街角に立つ人々、又はベンチに坐る人々、そして職安の椅子に坐る人達を描いたSoyer 兄弟が描く失業者達は決して絶望することなく、じっと耐えている風であった。流れる空気は静かで、のびやかに筆は運ばれ、人々の手の動き、表情は自然に描かれている。

Union Squareはあの2001年9月11日の同時多発テロ後、追悼のろうそく、メッセージが沢山の花々に添えられた。あの日から4ヵ月余り過ぎた。

独立して間もない頃から、この街で多くのアーチスト達が創作に意欲的に取り組んできた。これからも、大きな悲しみを乗り越え、人々の琴線にふれる作品が生まれて来ることを願っています。

(2002. Feb. 6)　　美術愛好会　酒井典子

Raphael Soyer Office Girls

Moses Soyer Employment Agency

春のハイキングの会

東海道自然遊歩道紅葉台コースを歩く

開催日：　2002年５月１９日（日曜日）

春のハイキングの会は、富士山の眺望がすぐれている東海道自然遊歩道を歩きます。

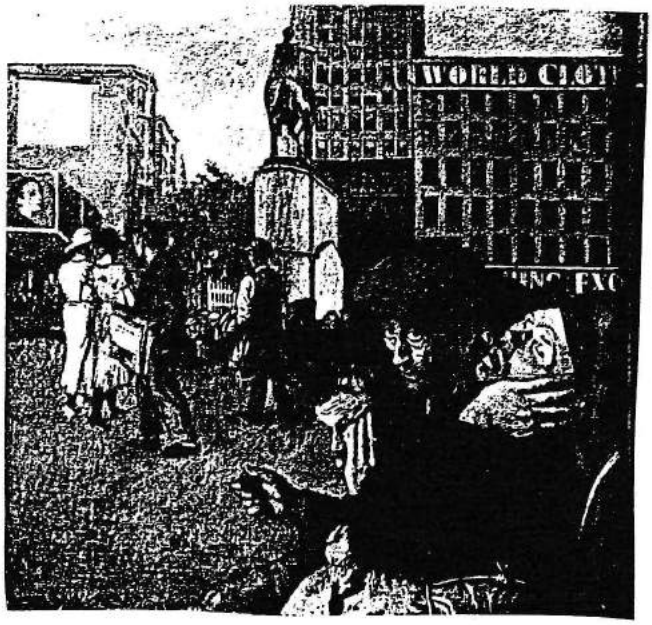
朝は少し早いですが、午前７時過ぎに新宿から、高速バスで河口湖まで行きます。

現地で集合し、一本木から足和田山を経て紅葉台（西湖）まで歩き、北麓から富士山を眺めます。

帰りは、同地の温泉に立ち寄り、富士急行河口湖駅からＪＲホリデー快速ピクニック号で新宿に戻ります。新宿着は午後６時過ぎを予定しています。

参加ご希望の方は４月１５日までにお問い合わせ下さい。詳細をお知らせします。

申込連絡先：　土居



Raphael Soyer Union Square

Isaac Soyer　Employment Agency

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ゴルフの会

本年第１回懇親ゴルフ会は次の予定です。

４月１１日（木）

泉カントリー倶楽部

申込み先　近藤宣之

當間きよみ

申込み締切り　３月２７日（水）

2001年度第２回ゴルフ懇親会は、10月18日（木）泉カントリー倶楽部において開催しました。２０名のご参加があり、結果は次の通りでした。

近藤宣之（優勝）、　山崎　恒（２位）、
伊藤道生（３位）、　荒金　豊（４位）、
磯崎一郎（５位）、　磯崎夫人（６位）、
伊藤洋子（７位）、　糟谷光彦（８位）、
西川文夫（９位）、　松澤美智子（10位）、
當間秀雄（11位）、　山崎規距子（12位）、
藤盛紀明（13位）、　神谷　豊（14位）、
當間きよみ（15位）、幸野眞士（16位）、
太田隆義（17位）、　酒井一郎（ＢＢ）、
藤盛冨美子（ＢＭ）、吉田久夫（棄権）。

日本ボストン会２００１年度総会

日時　２００１年１１月１６日（金）午後６時半
場所　ＮＥＣ三田ハウス　芝クラブ
議事　代表幹事挨拶、会計報告、活動報告、乾杯。
　　参加者挨拶。
出席者　３１名
遠隔地出席者紹介
　中垣正史氏（北海道・マサチューセッツ協会）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第９回総会は近藤副代表幹事のご挨拶で開会。今回は議事に入る前に関尚子さんのバイオリン独奏で「タイスのメディテーション」の曲を聴き、その後、茂木賢三郎会長のご挨拶、棚橋征一氏から会計報告、土居嘉子さんからの事務局報告、藤盛紀明副代表幹事の乾杯で、懇親会に移りました。

第９年度（00.9.1/01.8.31)会計報告では次の報告があり、承認されました。

総収入¥293,820、総支出¥314,716、残額-¥20,896
（資産:銀行預金、郵便貯金、貯蔵品合計¥989,456）

席上、出席者からもご報告を戴きました。

中垣正史氏からはマ州との交流についての近況のご報告があり、山田敬蔵氏は７４歳になられますが、お元気で、今年もボストン・マラソンに参加された旨報告されました。最後は土居陽夫副代表幹事のご挨拶で、来年の再会を約して閉会しました。

幹事会記録

２００１年１２月２日（日）出席者（１７名）

＊歴史を飲もう会・ハイキングの会、合同で上野界隈を探訪後、天ぷらや『天庄』で会食兼幹事会。

２００２年２月２１日（木）出席者（１４名）

＊年内イベント予定を確認。
　お花見の会（４月６日、前回発表より１日繰上）
　（追記　開花予想の繰上げで３月31日に変更）
　ゴルフの会（４月１１日、１０月１７日）
　ハイキングの会（５月１９日）
　歴史を飲もう会（札幌　７月１３～１４日）
　総会（１１月１５日）
＊会報第19号発行：原稿２月末締切、３月15日発行。
　延岡市の「第九」ﾒﾄﾞﾌｫｰﾄﾞ公演の寄稿掲載を決定。
＊茂木会長から次々期会長候補にMIT 佐々木さんを推薦したいとのお話あり、全員異議なく承認。
＊次回幹事会６月10日（月）

歴史を飲もう会

初夏の札幌旅行

今年は米国マサチューセッツ州と姉妹提携関係にある北海道札幌市を訪問します。

同地には、明治初期の開拓時代に、札幌農学校初代教頭として活躍したウイリアム・スミス・クラークや、時計台、道庁旧本庁舎「赤レンガ」などその頃に関連した記念像、建造物が豊富に見られ、日本とニューイングランド交流の歴史を学ぶ上で必見の地といえます。

また、北海道マサチューセッツ協会が同市に存在し、毎年秋の当会の総会には事務局長の方にご出席頂いていること周知の通りです。今回の訪問時に、同協会の方々との交流なども実現できればと思います。

訪問は初夏の７月13日（土）～14日（日）を予定しています。この時期の北海道は気候さわやかで富良野のラベンダーやポピーなどが見頃となり、またその先の美瑛の丘には、麦秋が広大な丘陵に展開する素晴らしい眺めを楽しむことも出来ます。

この機会に滞在日程を少し延長して北海道の大自然に触れるのも意義有ることかと思います。

尚５月の連休明け頃には具体的スケジュールを決め、宿泊場所の予約など進める必要がありますので、参加希望者は４月末迄にはお申し越し願います。

連絡先：　篠崎史朗

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

“ボストンガイドブック”

留学生・旅行者にご好評のボストンガイドブックは、追加注文分が到着いたしました。

お知り合いでボストンに行かれる方がおられたら是非ご紹介願います（申込書同封）。ご入用の方は下記宛にお申越し下さい。

問合先:

「ボストンガイドブック」宛